

アジアに照準

<6>

「世界の工場」と呼ばれ、

安価な労働力による大量生産を武器に急成長を遂げた中国。最近では人件費が急騰し「工場」から「市場」への関心が高まっているが、世界の企業が数多く進出している産業補完性の高さは、今も企業を引きつける。

偏光フィルム製造のポラテクノ(上越市)は2011年末、江蘇省無錫市で現地法人の第2工場を稼働させた。自動車生産が世界的に伸びる中、車載用液晶ディスプレイに使う偏光フィルムの増産が目的で、製造工程の後工程に当たる切断から検査までを担

決断

攻める県内企業

中国 ①

う。

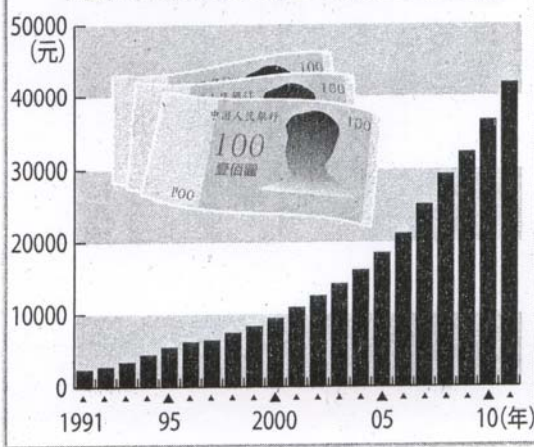
中国生産を開始したのは、進出企業が増え始めた03年。納入先であるプロジェクターの製品メーカーが、中国で製造し始めたのを契機に進出を決断した。当初は偏光フィルムをフランスに張り付ける作業と検査業務のみで、切断工程はなかった。

大島浩一経営企画室担当課長(左)は技術指導を徹底し、生産をこなすうちに品質面への不安が解消、信頼関係が増していった」と振り返る。従業員は当初の30人から約260人に増加。加工度が高く人手が必要な後工程を任せられるようになり、高い品質維持も可能となった。

一方で、中国は最低賃金が引き上げられ、主要都市で人

人件費高騰 効率化を模索

中国の従業員年間平均賃金の推移



(シエトロ新潟提供)

件費の高騰が続いている。同社も進出時に比べ人件費は2倍以上になったという。北折だ全て移管した場合、生産集積の経営企画室長(58)は「人中のリスクや新製品の作り込みを減らせず自動化も限界がある。人件費が毎年15%上昇されると計画も立てられない」とする。法令の改正や政治的な摩擦などいわゆる「チャイナリスク」は、「企業としては静観するしかない」と割り切る。

今後、現在7割を占める日

発行タイオード(LED)照明製造のルクス・エナジー(新潟市中央区)は11年に、広東省深圳市に合弁会社を設

立し、LED照明の生産に乗り出した。09年から中国の委託先で生産していたが、品質のばらつきが目立ち、自前の生産体制を整える必要性に迫られた。大型の検査装置を導入するなど品質を安定させ、委託時の5〜6倍となる月3万本に生産を増強した。

当初は日本市場向けだけを考えたが、現在は中国国内にも販路を拡大。急激な人件費の上昇もあり、「少量生産だとコストが掛かる。部材の仕入れ量を増やすなど効率化を図る必要があった」と渡辺和司社長(56)。電機メーカーのOEM生産も行うなど多様な展開を試みる。

人件費の高まりなどから脱中国の動きも出ているが、渡辺社長は「深圳以外は考えられない」と強調する。深圳市は金型や部品など部材屋が密集し、日系の電機メーカーも集中。「全てここで済む便利さがある」と立地のメリットを挙げる。今後は販路を広げ、3ライン中、1ラインの稼働に絞るのが命題と力を込める。



ポラテクノの現地法人「無錫宝来光学科技」の工場=江蘇省無錫市

世界の工場なお魅力